

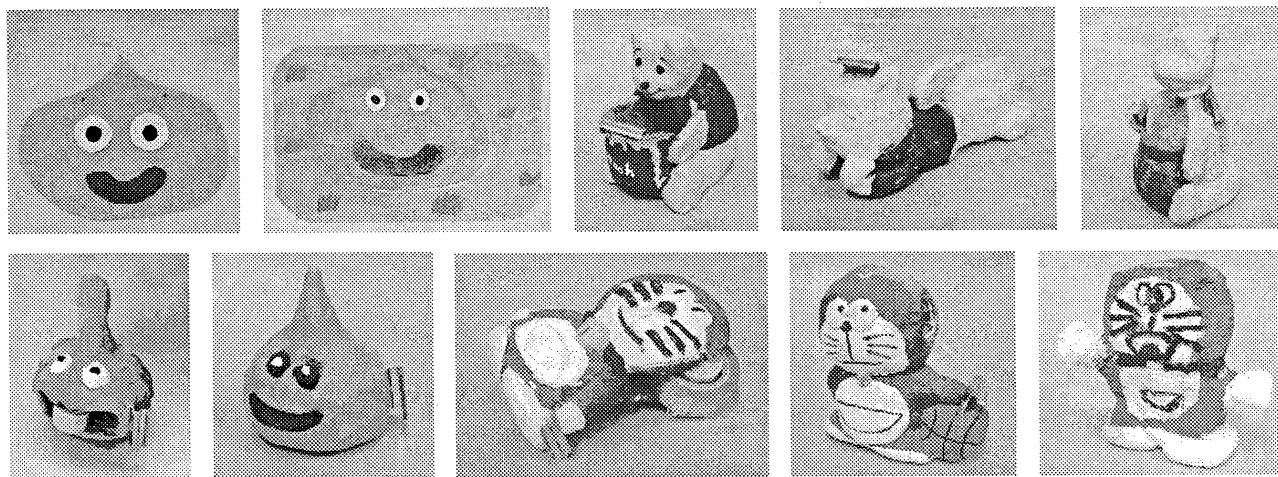
子どもの欲求を踏まえた基礎的な知識・技能の教授についての考察

美術科 西澤 明

1. テーマ設定にあたって

現代の子どもたちは氾濫する膨大な情報に取り囲まれており、様々な知識を収集するには非常に恵まれた環境にあると言える。美術に関してもまた同様であり、色、形はもちろんのこと、使用する材料や技法など、ありとあらゆる「表現活動」に関わる情報が身の周りにあふれている。特に美術科教育の場合には、学習指導要領に示された目標でもある豊かな感性の育成などは、直接美術に関する情報からだけではなくすべての事象から育つ能力でもあり、衣食住をはじめとする日常生活すべての情報がその形成に関わっているとも言えるだろう。こうした情報があふれる社会の姿に後押しされるように、学校の美術科教育で扱われる内容も多岐にわたってきており、子どもたちの表現活動、鑑賞活動は、益々多様化の傾向が顕著になってきている。実際、学習指導要領においても図・写真・ビデオ・コンピューター等映像メディアの使用、漫画やイラストレーションによる表現など、目新しい内容が取り上げられるようになってきているのは既知の通りである。こうした状況の中、日々の授業における子どもたちの活動の様子に、次のような点を感じるようになってきている。

第一には、表現活動において、具体的、視覚的なイメージ持てる子どもが多くなっている点である。作品のテーマ、表現方法、完成作品の構想などを行う際、漠然としたイメージを試行錯誤や試作によって具体化していくのではなく、早い段階からより具体的、視覚的なイメージを持つようになってきている。子ども自身の豊かな発想に起因するものならば歓迎すべきことだが、実際には出来合いの商・工業製品の模倣や、キャラクターをもとにした発想、制作が行われる場合が多い。その結果、表面的な美しさや商・工業製品の仕上がりを求める傾向が見られ、子ども自身の発想や構想とは言い難い問題点もある。



キャラクターをテーマにした作品

上段左2点「ピンナップボード（2年生）」、その他「粘土で作るテープカッター（3年生）」

第二には、画材、技法についての基礎的な知識・技能についての理解、定着が大きく不足している子どもが多くなっている点である。特に実際に作業を行える「技能」については、表現活動を行う上で最低限必要と考えられる「描く」「塗る」「切る」「貼る」といった作業が確実に行えない子どもが多くなっており、大きな問題だと考えている。その一方、前述のように多くの子どもたちが求める表面的な美しさや商・工

業製品的な仕上がりは、実現するためにはことさら確実な技能が不可欠であり、基礎的な知識・技能の理解、定着が不足している実態は、イメージの実現が困難という状況を生み出している。さらに、自らの創意工夫でよりよい作品を作り上げるのではなく、できるだけ短時間に、簡単な方法で作品を完成させようとする傾向もあるため、抱いたイメージの実現が困難な場合、急速にやる気が低下し、いい加減な取り組みが見えてくる。いい加減に取り組めば、作品の状況はさらに悪くなり、こうした悪循環が、美術嫌いの子どもを作ることにもつながっているように思う。

こうした現状の原因については、新しい表現方法や、表現活動による二次的な陶冶を重視し、その実現に不可欠な知識・技能の習得を徹底してこなかった（していない）これまでの美術科教育のあり方に問題があるようにも思うが、現実の子どもたちの姿を一度肯定したときに、より具体的、現実的な原因として次の三つの原因を作業仮説として考えた。すなわち、①送り出される情報の量が膨大であるにもかかわらず、その情報の取り扱いについては子どもたち自身に委ねられているため、子どもたち自身の興味関心や未熟な価値観で取捨選択が行われている。②子どもたちのニーズに応える、目新しいものや、楽しさ重視の教材が増えている。③美術科教育で確実に身に付けさせたい、最低限必要な基礎的な知識・技能の体系化、確立が遅れている。以上の三点である。

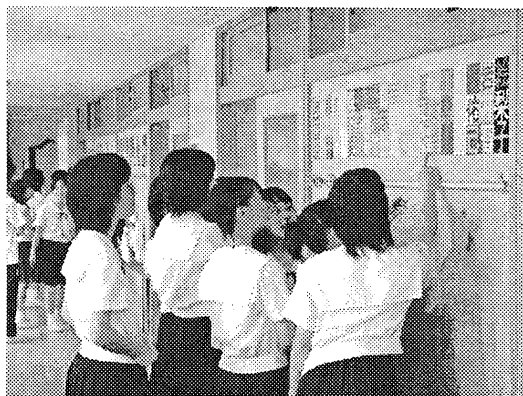
この作業仮定を元に、現在本校美術科では、①子どもたちの現状の分析。②よりよい授業成立のための教材開発と指導の方法。そして、③確実に身に付けさせたい基礎的な知識・技能。以上の三点について明らかにしていきたいと考えている。今年度の研究では、ここ数年実践している「表札レタリング」の単位において、学年それぞれの段階ごとの「基礎的な知識・技能」の一端を比較し、考察の材料とした。

2. 実践教材について

中学校では授業時間数の減少にともなって二時間続きの授業がなくなってきており、移動や準備・片付けに手間と時間がかかる写生の単元は特に活動しにくくなってきている。それとは逆に、生徒が使う絵の具の多くがポスターカラーやアクリルガッシュになったこともあり、手間や時間がさほどかからずに行えるデザイン領域の活動が増えているようにも思われる。しかし絵の表現活動の「基礎的な知識・技能」の学習を画材の扱いという観点で考えたとき、デザインの表現活動における絵の具の扱いは重要であるとも言え、ここ数年、意識して取り上げている。

本研究で取り上げる「表札レタリング」の単元は、いわゆる名前の文字をテーマにした、ごく普通のレタリングの教材である。自分の名前から三文字（漢字もしくは仮名）を選び、10cm×30cmの板材にレタリングを行う。完成後は一斉に教室前の廊下に掲示し、学級の構成メンバーの表札とする。なかなか全校生徒の美術作品を観る機会が少ないこともあって掲示されることを非常に楽しみにしており、掲示後も折に触れ立ち止まって鑑賞する生徒の姿が見られ、関心は非常に高い。そうした生徒の関心の高さは表現の活動に対する関心・意欲を喚起する

と同時に、上の学年の作品を観ることで次年度の同活動で実現させたい目標や構想を持ちやすくなる。実際に2・3年生では、教師が多くを指導しなくても完成度の高い作品が作り出されてきている。そうした成果を踏まえ、ここ数年は三つの学年で年度当初の同じ時期に同単元を行い、完成後一斉に教室前の廊下



掲示された表札を観る生徒たち

に揭示することで、一年間の美術の授業に対する生徒の関心・意欲を喚起すると同時に、学年それぞれの段階ごとの「基礎的な知識・技能」の一端を比較し、今後のあり方を考える参考としてきた。前年度の作品を観ることができない1年生が作品のイメージをつかみにくい問題もあり、今年度は2・3年生の制作を先に終え、1年生が上級生の作品を観る時間の確保を図った。

3. 生徒の欲求と単元の目標

過去数年間の本単元の中で、教師が問題としてとらえているのは、より美しい仕上がりを求める中学生の発達段階に対して、それを実現するために必要な基礎的な知識・技能の習得の低さである。教室前に展示後に書かせた相互鑑賞のワークシートで「今回の活動で、やりたいけれど自分にはできない、ここが苦手というあなたの弱点を教えてください」という設問を置いたところ、ほとんどの子どもの回答に大きく二つの傾向が見られた。一つは「ムラなく塗りたい」「はみだしてしまう」「まっすぐ塗るのが苦手」といった声に代表される、色塗りが苦手という意識。もう一つは、「模様をつけたりしたい」「グラデーションがしたい」といった、より高度な表現を行いたいという意識である。この二つの意識は、一言で言えば「できない」のに「してみたい」という一見高望みとも思えるものだが、逆の言い方をすれば「してみたい」が「できない」わけで、ここにこそ授業で応えなければならない子どもの欲求が現れているともいえそうである。「楽しさ」が活動の主たる目的で、子どもの欲求もそうならば問題ないのだが、中学生の多くはより美しい作品の実現を求めるようになっている。そのためには基礎的な知識・技能の習得を確実なものにしていく教材計画、授業のあり方が求められると考えられるのである。

自分の作品で、もっとこうしたかったということはなんですか？

線をガタガタにしないようにする。

もっとはみださずに描けばよかった。

色使いをもっと考える。色の組合せをもっと考える。

黒と白の作品にすればよかった。もう少し黒を使って目立つようにしてみたい。もっと白黒の作品にしたい。

色がパステル調過ぎたかなって思う。黒とかもっと引き立つ色にすればよかった。

模様をもっと入れればよかった。模様を描きたかったです。

やりたいけれどできない、苦手なことはなんですか？

角を塗るのが苦手。

グラデーションを使う。グラデーションをしてみたい。グラデーションわからん！グラデーションが作れない。

グラデーションのこつがわからない。みんなの作品でグラデーションを見てすごいなあって思った。私には多分無理…。

立体的にする。影のつけ方。

まっすぐに塗るのが難しい。直線を絵の具で描くこと。直線をきれいに塗りたい。

端のところをまっすぐに描くことができない

細いところを描くのが難しい。はみださずに塗ること。面相筆を使って端を塗ることが苦手です。

イメージがわからない。

色の組合せが苦手。美しい混ぜ色。

色の作り方。一度作った色をもう一度作るのが苦手です。下描きが少し透けてしまう。絵の具がすぐなくなる。

色が混ざってにがらないようにしたい。ムラができること。

途中で嫌になる。好みにならなかったら投げやりになる。

そこで本単元の活動の目標としては、基礎的な知識・技能の確認と習得を中心とし、具体的な内容としては「絵の具を溶く」活動と「絵の具を塗る」活動に分けて考えている。「絵の具を溶く」段階では、「①適切なパレットの使用方法」「②絵の具と水の量の配分による状態（隠ぺい度、筆運び等）」「③混色時の色による主色と加色の決定」「④ムラのない混色の方法」を、「絵の具を塗る」段階では「①筆の選択」「②筆の持ち方」「③運筆（方向、角度）」を基礎的な知識・技能と位置付け、その習得を図った。各学年において目標を発展的に扱う点については、第2学年では「混色した色の使用」、第3学年では「レタリングにおける変形」を設定し、色塗り作業については3学年すべてで目標、評価規準を変えず、三年間を通して確実な習得をめざしている。

4. 具体的な取り組み

(1) 絵の具を溶く段階

「絵の具を溶く」段階では、作られる絵の具の量とその状態が制作を大きく左右する。子どもたちに見られる問題点としては、まず、作られる絵の具の量が少ないため、一つの枠を塗っている途中で作り足すことになり、塗られた絵の具にムラが生じる問題が挙げられる。塗りたい枠の面積と絵の具の量についての経験が少ないことが最も大きな原因ではあるが、パレットを使用する際、多くの子どもたちが小さなマスを使って絵の具を溶く状況もその原因になっている。絵の具を出すのがもったいないという意識があるらしいが、大きなマスを使って多めの絵の具を溶き、もったいないと思わずに余らせる量を指示することで、解決が図れた。

次に、絵の具を溶く水の量が適当ではない子どもが非常に多い問題が挙げられる。水が少なくベタベタで塗りにくかったり、逆に水が多すぎて下描きの線が消えなかったりするわけだが、子どもたちはあまり意に介さず、そのまま作業を進めている場合が多い。これも絵の具の状態によって絵の様相が変わるような活動の経験が少ないことが原因として考えられるが、これまで教師が自然に行ってきた水の量の調整といった単純な作業について、あらためて具体的な指示を出して一斉に試作してみるような活動が必要になっている。

二色以上の絵の具を混色する際にも問題が見られる。絵の具を完全に混ぜ切らず、例えて言うならマール状のまま使用する子どもが多い。確実な指示が必要である。

さらに二色以上の絵の具を混色する際、意図する色を作るために、ある色に別の色を少しずつ加えて、絵の具の割合を調節するわけだが、明度の低い絵の具を主色にし、そこに白や黄色など明度の高い色を加色する混ぜ方をする子どももいる。この方法だとなかなか明度は上がり、いたずらに混色された絵の具の量だけが増えることになるが、途中で気がつく子どもは稀である。いったんストップをかけ、パレットの別のマスに加色していた明度の高い色を出させた上に、できあがってしまった絵の具を少しずつ加えていくように指示を出す必要がある。

こうしたこと以外にも、机の上を整頓させたり、水入れやパレットの適切な置き場所を指示したりと、一から十まで指示をしなければ全員が同じスタートラインに立てないのが現状である。絵の具を塗る活動に入る以前に考えなければならないことは予想以上に多いのである。

(2) 絵の具を塗る段階

絵の具を塗る段階に入ると、さらに様々な具体的な問題点が明らかになる。まず始めは使用する筆の選択である。当然細かな部位は面相筆などを使用し、広い面積は平筆や彩色筆で塗ることが基本だが、それがなかなかできない子どもが多い。細かな箇所を平筆で塗ったり、広い面積を面相筆で塗っ

たりする姿は日常的によく見受けられるのである。この問題は知識・技能というよりも、子どもたちの口からしばしば聞かれる「面倒くさい」という言葉に代表される意欲のなさに起因するところが大きいように思う。

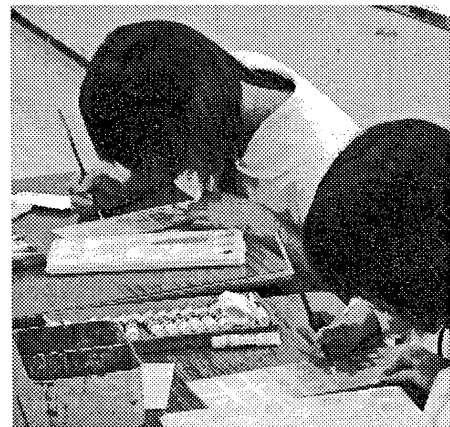
実際に塗り始めた子どもの様子を見て気付くのは、筆に含ませる絵の具の量の多さである。パレットの縁や水入れの縁で、筆に含ませる絵の具の量を調節してから塗る。それも言わなければならない子どもが多いのは驚きだが、現実でもある。

まっすぐな線を塗ったり、はみ出さないように塗ったりするのに必要な技能は「運筆」の方法であろう。ここでは様々な事柄を考えなければならないが、基本的には筆を動かす方向、画面と筆の角度、筆を入れる場所と止める場所といったことになるだろう。筆を動かす方向については上から下、右利きの場合は左から右が塗りやすい方向になるはずで、筆の側面が向かって左の輪郭線に沿うように、ある程度寝かせた角度で塗っていく形が基本である。ところが子どもたちの筆の多くは、書写のように垂直に立った形で運ばれる。その姿勢で塗ろうとすると、塗ろうとする箇所は手前に引かれることになり、覆い被さるような姿勢で描く姿になるのである。これについては、ある時鉛筆の持ち方がおかしい子どもが多いと感じた時に、その持ち方だと掌の中で立った状態になるのではないかと気が付いた。実際に筆を持つ手の形には明らかに問題があり、機能的な運筆には不向きだと考えられる

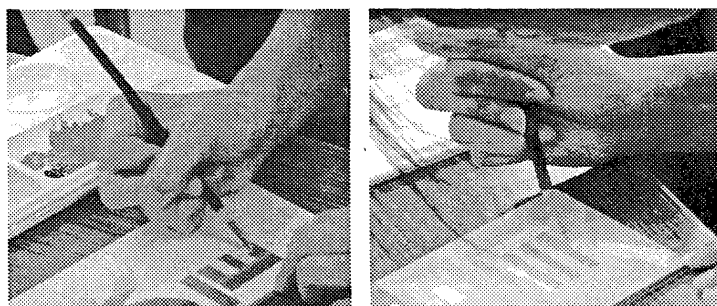
のである。この考察については現在仮説の段階なので、近いうちに状況の調査と結果をまとめたいと考えている。いずれにしても、美しい色塗りを行うためには、中学校段階でも姿勢や、筆の持ち方といった、基礎中の基礎から指導をする必要があるのは間違いないだろう。

5. まとめ

中学生の発達段階における欲求は、イメージ先行で、非常に具体的かつ美しい作品を求める傾向にあるようだ。しかしその反面、一定の成果を実現するために必要な基礎的な知識・技能の定着の状況は低く、その原因は小学校からの段階的な学習と中学校で行うべき学習の体系化ができていないことに寄るところが大きいように思われる。この点については、近いうちに小学校図工科との連携活動の中で明らかにし、取り組んでいく必要があると考えている。しかし美術に関わる学習内容だけでは対応できない問題があることも予想される。それは取り組みに対する意欲や前向きな姿勢といった心の働きに関わるものであり、今の子どもたちに大量の情報のみを与える環境を整えながら、その結果、現れる子どもの姿に対して危機感を持ち、対応を考える姿勢の希薄さにもあるように思う。現状をしっかりと見つめ、分析を行い、必要な目標を明確に持ち、明確かつ楽しい教材の開発や授業のあり方を今後も考えていきたいと考えている。



立った状態の筆（親指の位置に注目）



筆の持ち方の問題

2年生の作品に観る様々な表現の現れ

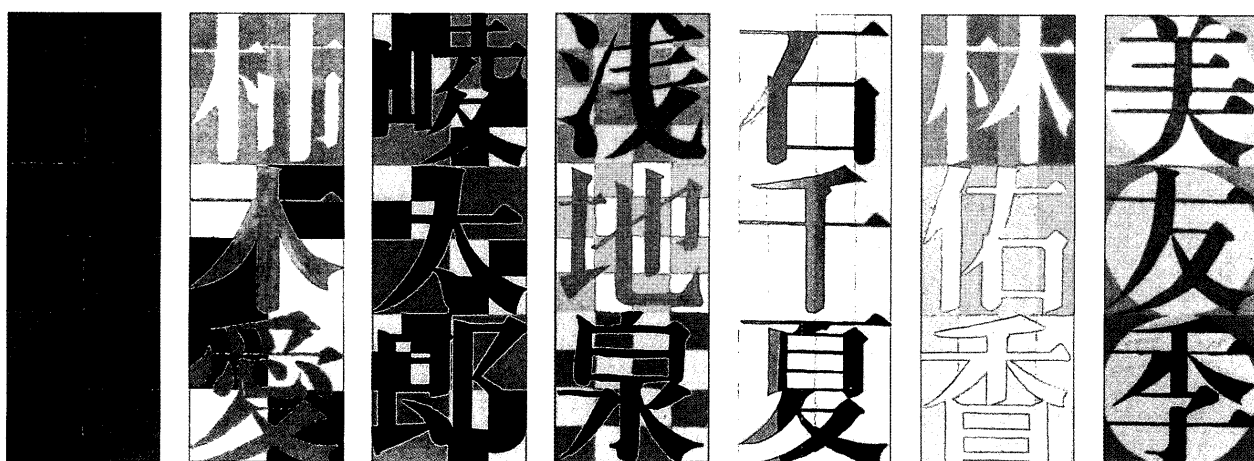


最小の色数2色で地と図を塗り分け

地か図のどちらかが単色

6色(3文字×2色)使用

1文字について地と図の2色で塗り分けをした最も基本的な作品。最も少ない場合は2色、最も多い場合でも6色で作品が完成している。これが基本であり、これでも十分に個性ある表現は可能である。



1文字の背景を4分割

1文字の背景を16分割

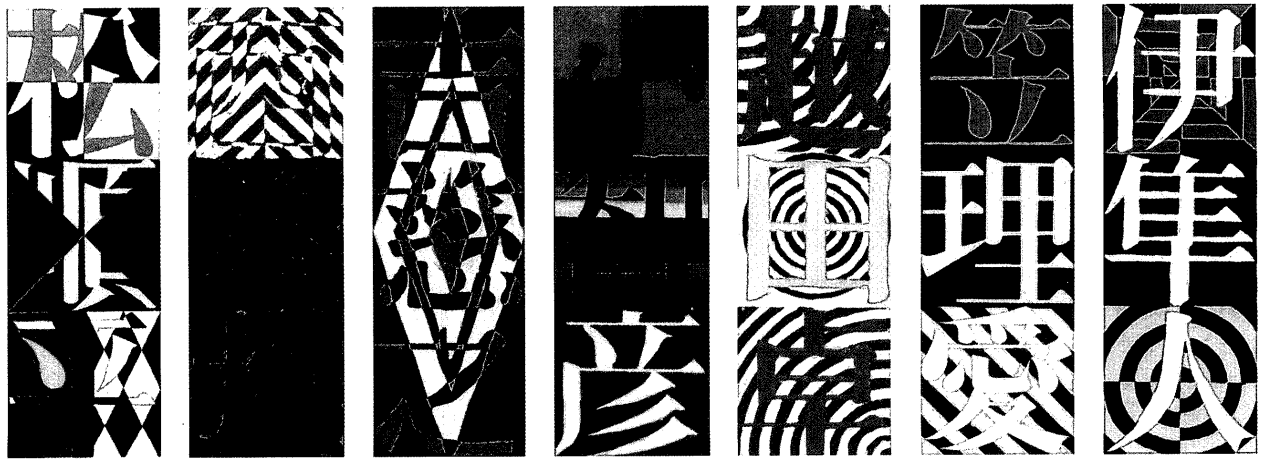
背景を縦に4分割

背景に円



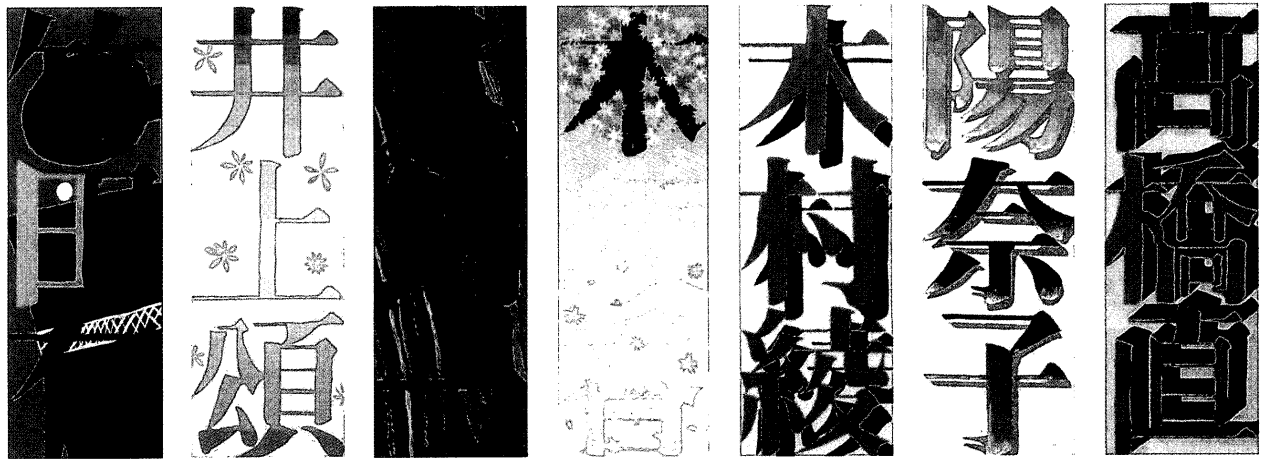
対角線による斜め方向の分割

基本の地と図だけでは物足りない場合、様々な方法で画面を分割して色面を増やす生徒が多く観られる。ただしその分一つの枠は小さく複雑になるため、基礎的な技能が身に付いていないと作業は当然困難になる。



複雑で細かい分割による画面構成

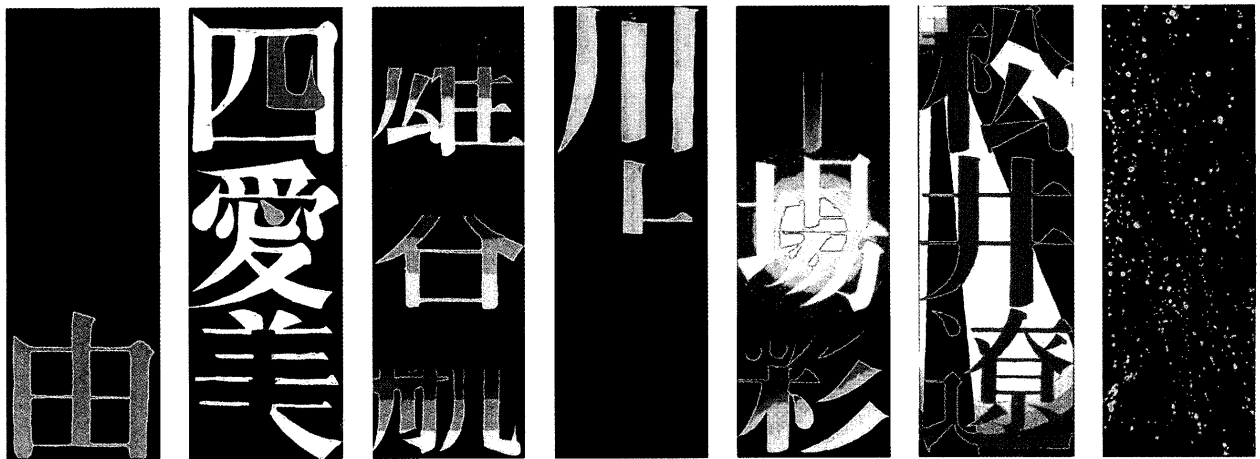
技術的に余裕がある子どもは、自発的、意欲的により複雑な分割を試みる場合が多い。この場合、細かすぎて構想がしにくいこともあってか、子どもの関心は色の組合せよりも、画面構成そのものに向いている場合が多いようだ。



「卓球」「花」「木目」など、具象のイメージを取り込んだ作品

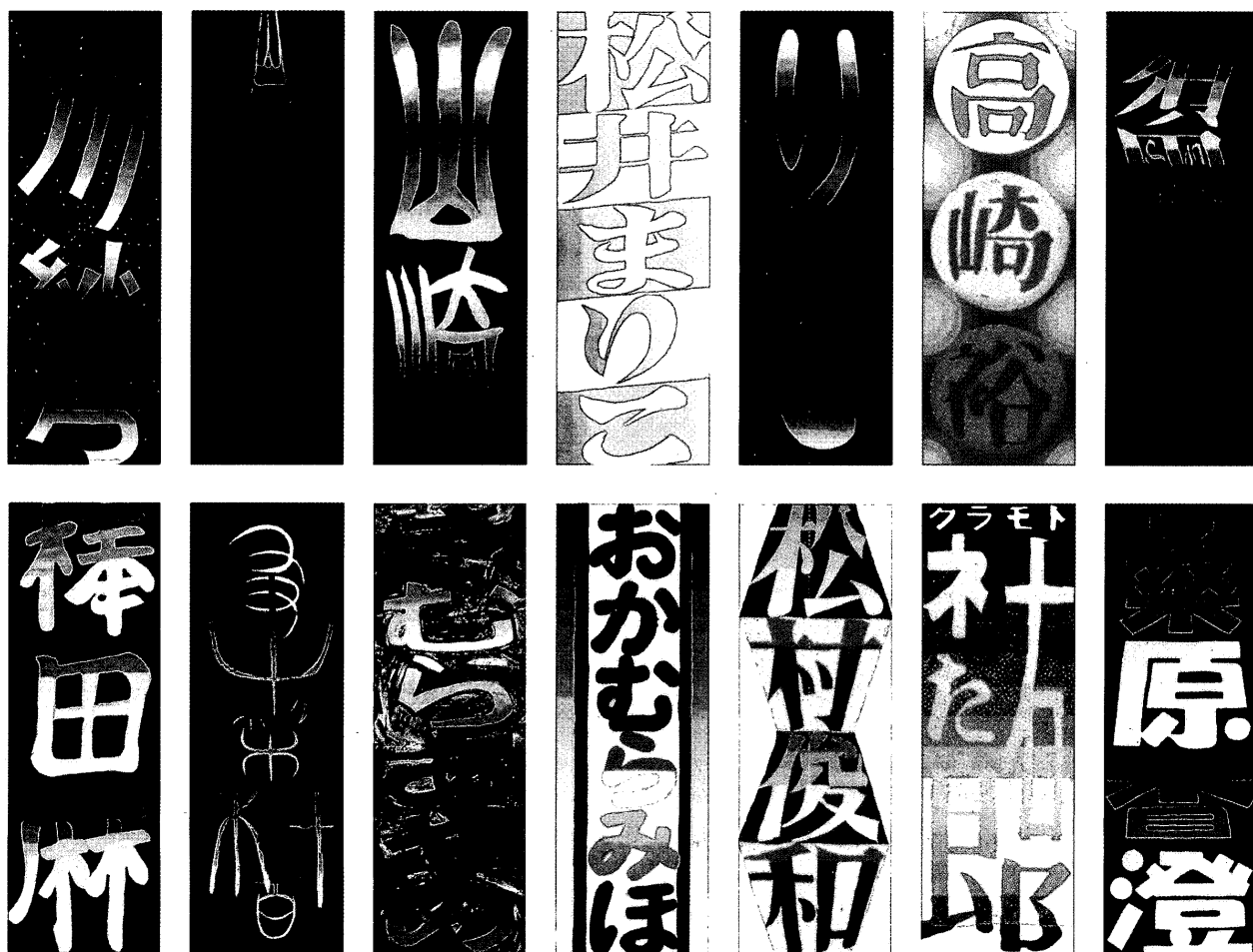
陰影をつけ、立体感を取り入れた作品

自分のテーマを明確に持った子どもは、そのテーマ実現に向けた具体的な問題意識を持つ場合が多く、資料を探したり、試作を試みたりすることで、その実現を図ろうとする。



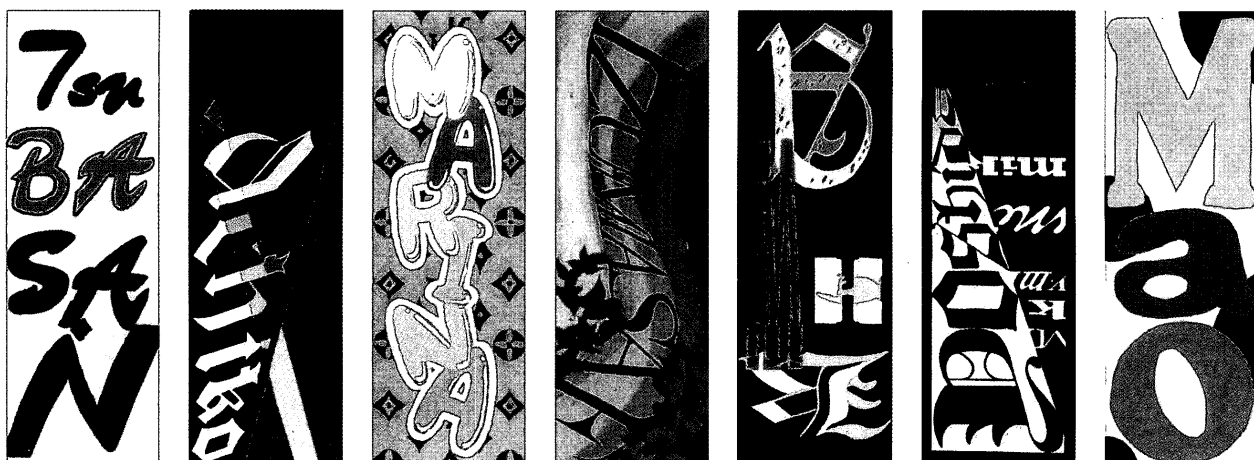
黒を使う子どもが多いのも、中学生の傾向である。ただしここでは安易な決定というよりも、黒と隣り合わせることで、組み合わせた色が明るく、鮮やかに見えることに起因しているようで、グラデーションなど、比較的難易度が高い技法を組み合わせる傾向が多く見られる。

3年生の作品に観る1・2年生への影響



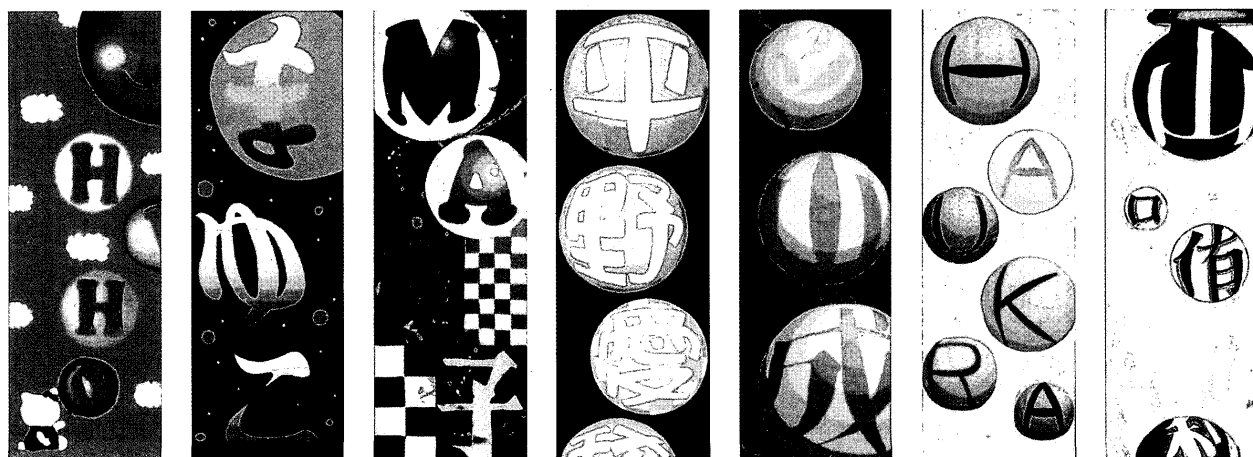
グラデーションを使った作品

グラデーションについては、授業で共通に教えることはないのだが、その視覚的効果の高さから例年取り組む子どもが多い。黒の背景にグラデーションで描かれた文字は、白の混色によって一際明るく見えるが、2年生の作品に同様の表現が多く見られることから、子どもたちにとってその印象が強いことがうかがえる。



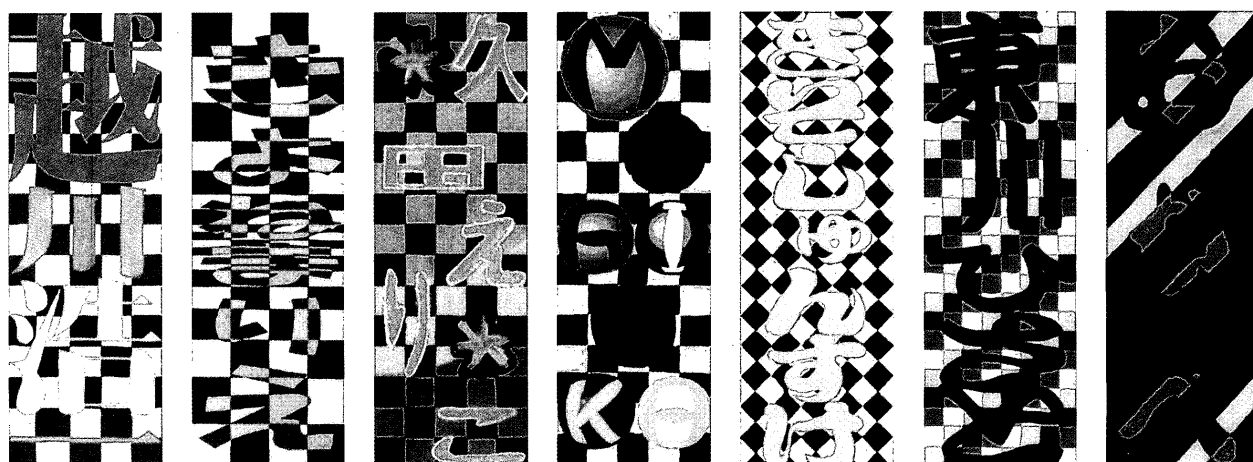
英字を使った作品

1年時にゴシック体、2年時に明朝体を使ってきているため、本来ならば漢字のほうが作業はしやすいはずだが、英字を使いたがる子どもが多く見受けられる。かっこいい、かわいいと感じる書体の豊富さもさることながら、今の子どもたちにとって英字は日常的に見る機会が多い、使い慣れたものだとも考えられる。2年生にとってはあこがれになっている。



球面に文字が配置された作品

球面の表現は相当高度な技術を必要とする取り組みであり、構想の段階で教師がその困難さを指摘するのだが、毎年挑戦する子どもが多い。困難であっても、それが実現されることに対するあこがれがあるのかもしれない。



細かな分割による市松、縞模様の背景を持つ作品

実際の技能と比較した時に、あえて細かく、困難な作業を選ぶ子どもが非常に多い。ゴシック体、明朝体という制約がある1・2年生にとっては、背景の構成と色の組合せで表現できるこうした作品は、比較的参考にしやすいのかもしれない。



豊かな発想と高い描画技能による、完成度の高い作品

3年生ともなると、中には非常にレベルの高い作品が作られる。1・2年生にとってはその技量は感嘆すべきものであり、自分の制作における大きな目標とも成り得るものだろう。

2 年生「表札レタリング」ワークシート

廊下の 2 年生の表札レタリングを見て回り、下の記入欄を丁寧に書き上げてください。

自 分 の 作 品	<p>共通した目標だった「美しい塗り方」「美しい色の組合せ」以外に、「こんな作品にしようと思ってかいた」「こんなところが工夫したところ」といった、作者にしかわからない製作の意図を教えてください。</p>	
	<p>製作の意図はうまく実現できましたか。 (A - 意図以上のものができた B - ほぼ意図通りのものができた C - 意図したものができなかった)</p>	
	<p>「ここをこうすればよかった!」「もう一度かくならこうするな」ということを教えてください。 ただしできると書くことを書いてください。</p>	
	<p>今回のレタリングの活動で、「やりたいけれど自分にはできない」「ここが苦手なところ」というあなたの弱点を教えてください</p>	
友 人 の 作 品	<p>「これはすごい!」「この人はうまいな～」という作品を 10 点まで選んで、その理由と一緒に教えてください。 名前がわからない作品は「〇組の右から〇番目」と書いてください。</p>	